
ムーンリバー

秋鹿 柚玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムーンリバー

【Nコード】

N5808R

【作者名】

秋鹿 柚玖

【あらすじ】

これは月が今より一回り大きくて、寂しがりやだった時の話・・・。

ずっとずっと昔。

今より月が一回り大きく、そして寂しがり屋だった時の嘸。

*

ばちやつ。

思いもしない音に驚き、少女は櫂を動かす手を止めた。

星々の囁きすら吸い込むほど静謐とした永遠の空間。

ここはその壮大な宙に流れる銀色の河。

雄大な河に浮かぶのは少女が乗った粗末な小舟と……そして。

(……人?)

盛大に水飛沫を飛ばしているそれは確かに人だった。河の水とみまごうばかりに美しい銀髪の青年である。

少女は円らな青の瞳をパチパチさせ、流れてくるそれを見つめた。

この清浄な空間で青年だけが場違いな存在だった。

流されるものかと水を掴み留まろうとするが、それは藁に縋るより意味のない行為でしかなかった。

河は少女の方に向け、ゆったりと溺れる青年を運んでくる。

あつぷあつぷと水面に沈んだり、這い出たりと忙しない青年は少女の存在に気付いたのか、懇願の眼差しを少女に向けた。

捨てられた子猫のようないじらしい瞳に見つめられ、少女は息を飲み、そして感嘆の吐息を洩らした。

(ここ……他にも人がいるんだ)

*

果てのない宙はどこまでも澄んだ闇一色。

少女は遙か彼方に輝く星々の瞬きだけを頼りに一人、宙に架かる雄大な河を小さな舟で渡っていた。

持ち物は粗末な木の小舟と銀色の石の欠片が一つだけ。

綿毛のような白い薄での衣を纏い、細い手で櫂を持ち河の上流を目指す。

いつから自分がこうして宙の大河を渡っているのか、目指す先に何があるのか何も分からない。

それどころか自分が何者なのかも、少女は何一つ覚えていなかった。

気付いた時にはもう、この宙の河に舟を浮かべて漕ぎ出していた。

この小さな石の欠片を届けなきゃ……。

少女に分かることはただそれだけ。

果ての見えない大河に一人。

少女は使命感だけを抱き、果てのない旅を続けている。

時折、緩やかな河の流れに乗って不思議なガラクタが流れていく。どれも少女が話しかけても答えることのない無機質なものばかり。生きて動いて少女の声に答えるものは今まで一つもなかった。

それでも少女はすれ違うガラクタ達に声を掛け何処から来たのか問い、流れゆくガラクタ達に労りの歌を歌って聞かせた。

「月の河に小舟を浮かべ

あなたの元に胸を張って

渡って行くわ」

河の流れのように緩やかで、星の囁きのように繊細なメロディー。月の光のように優しく、揺れては銀に輝く水面に少女の愛らしい声が響いた。

答えが返ってくるかもという淡い期待を抱きながら、自分自身を慰めるように歌い続ける。

この何処までも続く宙は怖いほどに美しいが、一人でいるにはあまりにも広すぎて。

暗闇に飲まれそんな小さな身を抱き締め、少女は泣きだしてまいそつになるのを懸命に堪えた。

物言わぬガラクタ達だけが孤独な旅の心を慰め、少女に果てのない河の先に漕ぎ出す勇気をくれる。

(彼らはこの河の始まりから来たのだわ)

この河に岸边はない。河の淵からは深い宙に向かって河の雫が流れ落ち、星屑となって闇に散らばる。

(大丈夫。この河を真っ直ぐ進んだ先に、わたしを待っている人が必ずいる)

彼らがやってきた場所こそ、自分が目指すところ。

悲しみに凍った涙を拭い、少女はまた、雄大な河の先を見つめ歌を歌いながら果ての見えない旅を続けていく。

*

バシャバシャつと盛大に水をかく音が不協和音のように宙に響く。

(ホントに人だわ。動いてこっちを見てる)

ガラクタシが見たことのない少女は驚きに満ちた眼でその銀髪の青年を見つめた。

ガラクタならいざ知らず、目の前で溺れている青年は一応生きている。

岸辺のない河で彼はずっと溺れていたのだろうか。それとも少女のように初めは舟に乗っていたのか。

付近を見渡しても舟らしきものは見当たらず、青年の来た場所は分からない。

青年は大きさに水飛沫をあげ、まるで河の水と戯れているかのごとく手足を動かしている。

少女は哀れむような眼をゆっくりと自分の方に流れてくる青年に向けた。

(こんなにゆっくりとした流れなのに溺れるなんて……)

表情とは裏腹に少女の心は冷静だった。

(不審だわ。ずっと溺れているなんてありえない。それに……溺れ方が嘘くさい)

青年が自分の前辺りにきたところで少女は櫂を動かしその場を去ろうとした。

(関わらないことに越したことはないわね)

「ちょ、ちょっと待ってよ！ここは普通助ける場面だろ！」

溺れていた青年は必死の形相で少女の舟に向き直り、さっきまでの溺れぶりが嘘のような切れのある動きで泳いでくると少女の動かし難くしがみついた。

まさかの行動に少女は慌てて櫂を持つ手に力を込め振り払おうとするが、青年の力はもちろん少女より強く一筋縄にはいかない。

「なっ！離して下さい！」

「離したら君は僕を置いていくだろう！」

「当り前じゃないですか！大体、ホントは泳げるんじゃない！なんで溺れた振りなんてしてるの？そんな不審者に関わってられません！」

必死に青年から櫂を奪おうと少女は櫂を引いたが、青年もなかなか引き下がらない。

「溺れて命の危機に瀕している王子を心優しき姫が助けて運命の恋に落ちる！お伽噺のセオリーだろ？せつかくのおいしい場面なのに乗ってこないのは失礼だろ！」

「な、何訳の分からないことを言ってるんですか！　離して！変態！！」

穏やかな河に小波がたった。

二人とも諦めるつもりはないらしく、必死に櫂を取りあう。

「変態？姫が王子に対してそんな言葉を使っちゃダメじゃないか！」

「誰が王子ですか！ただの溺れた振りした不審者でしょ！」

「不審者言っな！　まったく雰囲気も何もあつたもんじゃない」

白熱したバトルに変化球を投じたのは青年だった。
やりきれないと言わんばかりに首を振ると、ぱっと權を持つ手を
離した。

「きゃっ！」

精一杯の力を込めて權を引いていた少女は青年という負荷がなくなつた反動で反対側に勢いよく転がり、尻もちをついた。
衝撃に舟が大きく揺れ、穏やかな河に大きな波がたつた。

(転覆しちゃう！)

少女は懸命に舟の縁にしがみついた。

青年は悪びれた様子もなく、波立つ河に優雅に浮かんだまま伸び
などしている。

「あゝよいしょっと。ずっと溺れてるのもしんどくてね、ちょっと
お邪魔するよ」

青年は舟を立て直そうと必死な少女を余所にのんびりとした声を
かけると舟の縁に手を掛け、一気に舟に乗りこんだ。
またその反動で舟が大きく揺れる。

「きゃっ！何を！」

青年の行動に驚き咎めようとしたが、舟はまるで嵐の中のように
右に左にと揺れ、少女はそれどころではない。

「ははっ。そんな必死にならなくてもそのうち治まるよ」

青年は助ける気はないらしく、朗らかな笑みを少女に向けるばかり。

「もーあなたは何なのよ！舟がひっくり返ったらあなたの所為ですからね！」

透き通るほどに美しく、音一つない悠久の宙に少女の怒鳴り声がこだました。

*

「まさか無視されるなんてね、そんなクールなお姫様も魅力的だね」
「その姫とか王子とか何なんです？わたしはそんないいものじゃありませんけど」

やっと舟の揺れが治まり、落ち着きを取り戻した少女は我が物顔で寛いでいる青年に渋い顔をした。

少し癖のある銀の髪は濡れて、青年の額にぴったりとくっついて
いる。

冴えいる月に似た青みがかかった銀の瞳はくりくりとして少しやんちゃな印象を受けるが、穏やかで整った顔立ちの所為かそんな瞳も優しげに見えた。

ゆったりと流れる銀の河に櫂を立てて舟が動かないように固定し、少女は正体不明の青年と向き合っていた。

タイミングを逃してしまい、今さら追いだすこともできない。
それに……。

(わたしの言葉に伝えてくれる)

その喜びを今さら手放すことが少女は惜しく思えてきたのだ。だが一度は見捨てようとした手前正直に喜べない。少女は嬉しさに緩む表情を無理に締め付け、ため息交じりに愚痴をこぼした。

「こんな不審者と出会うなんて」

「不審者とは失礼な。君だって僕からしたら不審だよ。一人で舟漕いで何してるの？」

「わ、わたしは」

答えようにも少女自身が答えを知らない。

動揺し言葉に詰まる少女の心を見透かすように青年は意地悪く眼を細めた。

「……まあ、確かに君はお姫様じゃないわな。お姫様は舟を漕ぐなんて肉体労働しないし。姫というには見た目が貧相だし」

「ひ、貧相！なんで初対面の人にそんなこと言われなきゃいけないの！」

少女はむくれたように頬を膨らませた。それを宥めるように、青年は大きさに手を広げる。

「あははっ。うそうそ！とっても可愛いよ。でもお姫様じゃない。だって物語のお姫様は王子を助けても幸せにはなれないんだから……」

きつと童話の人魚姫のことを言っているのだろう。

報われない思いを抱き、泡になったお姫様……。

でも……。

「それでも自分の気持ちに正直に生きたお姫様は幸せよ」

わたしには何も無い。

名前も、生きている意味も、そして自分が目指している先も……。少女は喉まで出かかった咳きを飲み込み、眉を寄せてそっぽを向いた。

「どういこと？」

丸い瞳を大きくして青年が不思議そうに少女の顔を覗き込む。

その真っ直ぐな視線を避けるように少女は切ないほど美しく揺らめく河の水面に眼を向けた。

「わたしもお姫様なら良かったのに。自分が何者か分かれれば王子様と結ばれなくても、きっと幸せだね。王子様に名前を呼ばれて、頬に触れられて。そうやって自分が出来上がっていく」

自分を映し出す鏡はこの河の水面だけ。

少女には名前も、自分の存在を確かにしてくれるものも何も無いのだ。

（名前を呼んで、触れて、わたしをわたしと認めてくれる人がいるなら、それはとても幸せなこと。結ばれなくても、そんな人と出会えたら……）

耐えるように胸の前で手を握り締める少女の髪にそっと青年の大きな手が触れた。

「君は何故自分がこの月影の大河を渡っているか知らないんだね」

「月影の大河ってどういうの？」

初めて自分が渡っている河の名前を聞き、少女は衝撃のまま、青年を見つめる。

青年は握りしめたままの少女の手を優しく包み込んだ。

その小さな手は權が擦れた傷が出来、今までの旅の長さを物語っていた。

少女の今までの旅の孤独を少しでも分かち合うように青年はその手を強く握る。

「そう。この河は忘却の彼方へ流れる記憶の河。君が道すがら出会ったガラクタもたくさんの思い出の欠片達」

「誰の……思い出の欠片なの？」

「僕の、あるいは君のかもしれないね」

青年は意味ありげに微笑む。

「君が何も知らないのは仕方ないことさ。だって君は今、思い出を取り戻す旅に出ているのだから」

本当のことだろうか、何故彼が少女自身も知りえないことを知っているのだろうか。

少女は戸惑うように青年の瞳を見つめた。

「お、思い出を探す旅？」

「上流を目指してるんだろ？全ての始まりはそこにある。思い出が溢れだす源に向けて君は旅をしているんだ」

青年の瞳は銀の水面の光を受け、凜と輝いている。

その真剣な瞳には何の嘘も偽りもない。

驚きに声も出ない少女に青年はウインクをしてみせた。

青年の柔らかな声はすると少女の心に染み込み、懐かしいような愛しいような不思議な感覚が胸に広がる。

何故だろう。

嘘か本当かも分からない青年の言葉に暗かったはずの目指す先に光が差した。

少女は高鳴る胸の鼓動を必死に抑えながら、青年を見上げる。

「あなたは何者なの？」

「僕？僕はハツクルベリーだよ」

青年は瞳を優しく和ませ、事もなげに答えた。

「……ハツクルベリー？それがあなたの名前？それとも物語の登場人物に自分を譬えているだけ？」

「その両方だよ。僕の名前でもあり、僕は物語の登場人物でもある名前があるのがうらやましいかい？」

「そ、そんなこと……ない……」

絞り出すように答える。

広い大河を一人で渡るのに名前など必要ない。

それでも懂れてやまないのは名前が自分の存在を認めてくれる気がするから。

「ははっ。うらやましいって顔に書いてある」

冷静に心を見透かされ、少女の頬は一気に上気した。

「だ、だってわたし、何も知らないんだもの。河の名前も知らなかったし、何故一人で河を渡っているのかも分からない」

自分で言葉にすると何故だか胸の奥が痞え、目頭が熱くなる。

目の端に溢れそうになった熱い雫を誤魔化すように少女は下を向いた。

「僕の名前を半分あげるよ」

「えっ」

いきなり覆いかぶさるように抱き締められ、少女は戸惑うように少女は身動きした。

しかし大きな安堵感をもたらす温かみがくすぐったくも心地よく、そのまま青年に身を任す。

青年は少女を抱きしめながら、優しく囁いた。

「君のことをベリーと呼ぼう。僕のことをハックと呼んで」

「ベリー？」

甘く囁かれた耳が熱を帯びて赤くなり、与えられた優しさに胸が高鳴った。

「頬が真っ赤でベリーみたいだからね。眼も赤いし」

「あ、赤くないもん！」

眼の前でからかうようにウインクするハツクを押しつけるようにして慌てて距離を取るとベリーは自分の眼を擦った。

長い時間の中で何度涙を流したことだろう。零れる滴は冷た過ぎて、肌に触れる度にその冷たさに孤独を感じた。

ベリーにとって涙は悲しみの象徴でしかなかった。いつも上に輝く星を見上げては堪えきた。

でも……。

(今日の涙は温かい)

解けたした悲しみの涙は温かい春のようにベリーの心にじんわりと染み込む。

「あ、あの……ありがとう」

ベリーは真っ赤に熟れた果実のような頬を押さえ、恥ずかしそうにハツクを見上げた。

「いえいえ。でもお礼を言わなきゃいけないのは僕の方だよ」

「え？」

愛しそうに自分を見つめるハツクの言葉の意図が掴めず、ベリーは不思議そうに小首を傾げた。

ハツクは小さく口の端を上げるとベリーの疑問に答えることなく

大きく息を吸い、静かに眼を閉じた。

「　　月の河に小舟を浮かべ

あなたの元に胸を張って

渡って行くわ」

それは銀の大河のように優美で、星の輝きのように繊細なメロディーが銀の水面を撫でるように優しく流れ、ベリーの心に新たな風を吹き込む。

歌い終わるとゆっくりと眼を開き、ハックは照れたように舌を出した。

「それ……わたしの歌」

そう呟くのが精いっぱいだった。

それは孤独な旅の心を癒すたった一つの方法。

他にこの歌を知っている人がいるなんて。

「知ってるの？この歌」

「知ってる。だって僕はその歌に惹かれて流れてきたんだから」

そつとベリーの頬に手を当て、ハックは嬉しそうに顔を綻ばせた。

「河の、遠く向こうから柔らかくて優しい歌が聞こえたんだ。可愛らしい声で紡がれる歌は一緒に口ずさみたくなるほど心地よくても時々泣きそうなるほど切なげなんだ」

「信じられない……わたしの歌を聞いてくれていた人がいたなんて」

「ずっと聞いてた。誰が歌っているんだろって、会ってこの眼で歌っているところを見たいって願わずにはいらなかった。僕はずっと歌の主である君を探す旅をしてたんだ」

「わたしを探す旅？うそ……」

信じられないと目を大きくするベリーを慈しむようにハックはその小さな手を握った。

「うそじゃない。こうやって君に触れることをずっと願っていた」

満ち足りた表情で自分を見つめるハック。

ハックはベリーを包み込むように抱き締めると、慰めるように優しい声をかけた。

「君の歌が僕の生きる希望なんだ」

「……」

広い宙に流れる河を渡る一人旅。

歌は寂しさを紛らわす唯一の手段で、知っていることがあるだけでベリーは幸せだった。

(それだけでも幸せだったのに。わたしに触れて、名前を呼んでくれる人がいるなんて……)

ベリーの円らかな瞳から一滴、清らかな雫が零れた。

小さな涙は銀の大河に音もなく落ちた。

後から後から、溢れだす温かな気持ちは小さな胸だけではおさまらない。

「泣かないで。君を泣かす為に僕は来たんじゃない。君が僕に幸せをくれたように、僕も僕の出来ることで君を幸せにしに来たんだ」

「あなたに出来ること？」

涙で潤んだ瞳をハックに向ける。滲んだ視界でハックが白い歯を見せて笑った。

「僕の物語を、君の記憶に」

下

戸惑いを浮かべるベリーを抱き締めたまま、ハックは優しくな口調で語りだした。

ベリーはそつとと瞳を閉じた。

「まだ月が大きく、寂しがり屋だった時の嘸さ。

地上では一匹の小鳥が夜空に浮かぶ美しい月に恋をし、毎夜月を見上げて彼に会いに行く歌を歌っていた。

彼だけがいつも小鳥を見つめてくれ、小鳥の歌を聞いてくれる。

それだけで小鳥は満足だった。

月も美しい歌声に惹かれ、毎夜小鳥に会えるのを楽しみにしていた。

小鳥の歌は広い宙で一人ぼっちの月の心に染み込み、月は孤独を忘れた。

ある日、月はどうしても近くで小鳥に会いたくなり、月影を集めた自分の分身を地上に送った。

小鳥は月の分身をハックルベリーと呼び、二人は月の光が照らす一時を幸せに過ごした。

夜になると月影の中からハックルベリーが現れる。

まず二人は散歩をし、隠れ鬼をし、その後小高い丘に寝ころび、

朝日が昇るまで語り合った。

穏やかで、何気ない日々。

でもそのささやかな日々が二人にとって何物にも代えがたい幸せだった。

新月の夜は月が見えない。

そんな日はハックルベリーも姿を現すことはなかった。

でも小鳥は姿が見えなくても広い空の何処かに月がいることを知っていた。

だから雨の日も風の日も、どんな時でも月に届くように歌を歌った。

月は微かに聞こえるその歌を一つも聞き洩らさないように耳を傾け、小鳥のことを思った。

見えなくても繋がっている。寂しがり屋の月は小鳥を思うことでその寂しさを紛らわすことができた。

でもそんな幸せも長くは続かなかった。

小鳥は小鳥。

小さな体に与えられた命の期限は決まっていた。

小さな小さな小鳥がその小さな羽に埋まるようにして動かなくなつたのは新月の晩だった。

いつもの歌が聞こえない。

月は小鳥の死を悟った。

月は泣いた。

泣いて泣いて、月は壊れてしまった。

月の壊れた穴から止めどなく涙が流れだし、それは宙に広がり雄大な河となつた」

ゆつたりとした物語を終え、一息吐くとハックはベリーに笑みを向けた。

しかしベリーはそれに答えない。

「おやおや、寝ちゃったのか」

可愛らしい寝息をたてるベリーを抱え直し、ハックは愛しげにその頬に触れた。

「ずっとこの河を一人で漕いできたんだ。疲れているよね、月の可愛い小鳥さん」

ハックはそつと眼を閉じ、ベリーの額に口付けた。

「君に会いたかった」

切なげに揺れる銀の瞳は大切な人に出会えた喜びに満ち、清らかな雫で潤んでいた。

*

月は小鳥の死を嘆き、泣き続けた。

止めどなく流れる河には悲しみと共に小鳥との思い出さえも流れ出てしまった。

小鳥との楽しい思い出がより月の心を締め付け、小鳥の愛らしい歌を思い出す度に月は悲しみを深くした。

いつそ知り合ったこと全てをこの河に流してしまえたら。

しかし小鳥との思い出がなくなることはもつとつらいことだった。そんな月の涙が地上に降り、一雫、動かなくなった小鳥の上に落ちた。

これは月も知らないことだった。

悲しみに暮れた月はもう地上に目を向けることなどなかったから。

月は小鳥を思っただけで涙すること以外できなかった。

小鳥に月の思い出に満ちた涙が染み込んだ瞬間、小鳥は飛びあがった。

小鳥は月の雫に導かれるように宙に昇り、月の涙の河を月に出会うために漕ぎ出す旅に出たのだ。

しかしそれは長い旅だった。

月の悲しみが多すぎて、涙の河はどこまでもどこまで、悲しみの

川はとどまることなく続いていった。

蘇った小鳥は自分が何者なのか忘れてしまったが、河の始まり、つまり月に会いに行くことだけは忘れていなかった。

月の心に来た穴を塞ぐために、月の欠片を持っていく。

蘇っても忘れることのなかったこと。

それが小鳥の使命。

「大丈夫。今は忘れていてもかもしれないけど、きっと思い出す。この河は月の涙で、月の記憶たち。一滴掬って感じてごらん。僕たちの幸せな時間が蘇るから」

ハックは優しくベリーを舟床に寝かせた。

「君の持っている月の欠片は月の思い出。それで月の悲しみを塞いで」

ハックは離れがたいのか小鳥の髪に触れ、その絹のような柔らかさをじつと感じた。

ハックは別れを惜しむようにもう一度ベリーに口づけをした。さつきよりも長く、心を込めて。

ゆっくりと唇を離すと彼は愛しげに微笑んだ。

「待ってるよ、可愛い僕のベリー」

*

ベリーが気付いた時、唇に優しい温かさが残っていた。しかし舟にはベリーしかない。

「ハック？どこに行ったの？」

懸命に銀の大河を見渡すが、そこにはいつもと変わらない雄大な流れと美しい星宙が広がるばかり。

「わたし、まだお礼も言っていない。優しい物語をくれてありがとうって。ねえ、ハック」

必死に声を上げるが、小鳥の声は悠久の時を包み込む宙に飲み込まれ消えていった。

「ハック……やっと出会えたわたしの友達」

ベリーは悲しげに眉を寄せたが、何故だか涙は流れなかった。

(どうしてだろう？ハックとはまた会える気がする。この河の先で……)

ベリーはそつと傍を流れる美しい河の水を掬ってみた。

銀の水はキラキラと輝き、霧のような細かな粒子になってベリーを包み込む。

ベリーの青い瞳から涙が流れた。温かな雫はベリーの頬を伝い、銀の河に落ちた。

「温かい」

ベリーは切なげに微笑むと河に刺さった櫂を抜き、また河の上流を目指して櫂を漕ぎ出した。

この河の先に何があるのかベリーは知らない。

でも誰かが自分を待っていることだけは分かっていた。

愛らしいベリーの口が知らず知らずの内に紡ぐのはもちろんあの

優雅で優しい歌のメロディー。

「　　」月の河に小舟を浮かべ

あなたの元に胸を張って

渡って行くわ

あなたはわたしに夢を

与えてくれる

だからわたしは歌えるの

あの虹の橋のたもとで

いつものように

待っててね

月の河を優雅に

超えていきたい

大好きなあなたと」

月影の大河を渡る小舟が一艘。

涙を流し続ける月に向かってゆっくりと進む。

舟に乗っているのは小さな小鳥。

彼女が持っているのは小さな月の欠片を二つだけ。

り、細い腕で權を動かして月を目指す。

宙は美しい星々の瞬きに満ち、雄大な河を銀色に照り輝かせる。

かっ

広い宙の下、たった一人の旅。でももうベリーは寂しくな

自分の歌を聞いてくれる人がいるから。

そしてこの河の先にはきっと、ベリーを待っている人がいるはず

だから。

*

これは月がまだ今より一回り大きく、寂しがり屋だった時の嘸。
穴が塞がり、流れていった悲しみの分月が小さくなって、月の側
にはいつも優しい歌が流れるようになった嘸はまた別の機会に
。

下（後書き）

名曲ムーソリバーを聞いて、なんとなく考え付いた話です。

なんとなく真夏の、少し熱気を含んだ夜がこの曲に似合う気がするのは私だけでしょうか。

宇宙はきつと驚くほど冷たいところなのでしょうけど、この物語は真夏の夜が舞台です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5808r/>

ムーンリバー

2011年6月19日08時46分発行